



泊園書院と関西大学

著者	吾妻 重二
雑誌名	関西大学年史紀要
巻	20
ページ	1-15
発行年	2011-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/8805

泊園書院と関西大学

吾妻重二

泊園書院は江戸時代後期の文政八年（一八二五）、四国高松出身の藤澤東暎（一七九四―一八六四）によって大坂市中に開かれた漢学塾である。荻生徂徠の古文辞学を受けつぎ、経書や諸子、歴史、文学にわたる該博な知識をもっていた東暎により、泊園書院は大坂最大規模の私塾として栄えた。

明治六年（一八七三）、書院を再興した東暎の子の南岳（一八四二―一九二〇）は高松藩の危機を救った功労者として、また当代随一の学匠として名声高く、その学徳を慕って全国から学生が集まった。その著作もきわめて多数にのぼる。南岳の長子黄鵠（一八七四―一九二四）、次子黄坡（一八七六―一九四八）も書院の活動をよく継承

し、漢学振興と漢詩文普及のために尽くした。黄坡は戦後まもなく本学最初の名誉教授となった。

また、黄坡義弟の石濱純太郎（一八八八―一九六八）は黄坡と力を合わせて書院の講学にとりくむとともに、東洋の諸言語に精通し、西夏文字研究の先駆者となった。本学における最初の文学博士号取得者であり、大阪文化の研究者としても著名である。

江戸後期から明治・大正・昭和という激動期の中、泊園書院は政界・官界・実業界・教育界・ジャーナリズム・学術・文芸などの分野に有為の人材を輩出するとともに、大阪の文化・教育の発展のために多大な貢献を残した。そして戦後、同書院の蔵書や書画、印章などが一括寄贈

され、本学総合図書館に「泊園文庫」として収蔵されることになった。泊園書院と関西大学は切っても切れない関係にあるといえる（写真1および2）。以下、その特色と本学との関係について紹介してみよう。

一 幕末における大坂最大の私塾

そもそも、江戸時代から明治維新を経て昭和に至る近世・近代の激動期をくぐりぬけてきた漢学塾はまれである。いま、泊園書院の特色をいくつか挙げてみたい。

まず、門人の多さがある。すでに東暎の時代、教えを受けた門人は三千人を超えていたらしい。幕末の門人帳『泊園書生姓名録』（泊園文庫蔵）が載せるのは二百八十八名だが、これは寄宿生のみ記録であって、東暎門人の略伝を載せた『菁莪録』（泊園文庫蔵）の南岳序では、先考弱冠身任教育、至卒五十年、帷下之士、三千餘人、其遭遇事業不_レ一定也。

（先考、弱冠にして身教育に任じ、卒するに至るまで五十年。帷下の士は三千余人、其の事業に遭遇せざるは一定ならざるなり。）



写真1 泊園書院本院（東区東平野町、現天王寺区東平二丁目）



写真2 泊園書院分院、のち本院（南区竹屋町、現中央区島之内一丁目）

といっている。東咳は大坂居住時代だけでも足かけ四十年になり、平野含翠堂や豊岡藩・尼崎藩などでも講義を行なっているの、それらの聴講者を含めれば、東咳の聲咳に接した門人がこれぐらいでも不思議ではない。おそらくこれは当時の懷徳堂や適塾の塾生数をしのぐもので、泊園書院は幕末期における大坂最大の塾であった。当時の状況に関し、中井木菟麻呂『懷徳堂水哉館先哲遺事』は懷徳堂と対比して次のように述べている。^①

寒泉時代ノ懷徳堂ニテハ、経書ノ講義ハ朱註一方ノ單純ナル解釈ニ過ギズ、輪講其他書生方ノ研究ニモ、諸家ヲ交ヘ拏ゲテ、議論ヲ闘ハスコトヲ許サレズ、謹慎黙從シテ、教ヲ承クルヲ常トセリ、故ニ游学ノ書生、其教養ニ満足セズ、競ヒテ藤沢東咳ノ門ニ集マル形勢ト為リタリ。（同書卷六、寒泉ノ学風）

ここにいう並河寒泉は幕末期における懷徳堂最後の学主だが、『四書集注』など朱子による解釈をそのまま踏襲した単純な講義を行なうだけだったので、これに不満をつのらせた遊学の書生たちは東咳の門にさそって集まったという。学問と人徳を兼ね備えた東咳の力量をよく物語る記事である。

幕末期の東咳の評判は、嘉永六年（一八五三）に出版された『浪華風流月旦評名橋長短録』^②によっても知ることがができる（図1参照）。これは文人墨客を大坂の八百八橋に見立てた番付の一枚刷物で、相撲取の番付上位に広瀬旭荘や奥野小山が並ぶが、中央を見ると、行司役として懷徳堂の並河寒泉が五十間の京橋に、中井桐園が十五間の御成橋にそれぞれ比せられるだけなのに対して、東

嘉永六新板

浪華風流月旦評名橋長短錄

<p>東文堂藏板</p>	<p>豆葉町 橋</p>	<p>三十四町 橋</p>	<p>三十四町 橋</p>	<p>三十四町 橋</p>	<p>三十四町 橋</p>	<p>三十四町 橋</p>	<p>三十四町 橋</p>	<p>三十四町 橋</p>	<p>三十四町 橋</p>	<p>三十四町 橋</p>	<p>三十四町 橋</p>	<p>三十四町 橋</p>	<p>三十四町 橋</p>	<p>三十四町 橋</p>	<p>三十四町 橋</p>	<p>三十四町 橋</p>
<p>東文堂藏板</p>	<p>...</p>	<p>...</p>	<p>...</p>	<p>...</p>	<p>...</p>	<p>...</p>	<p>...</p>	<p>...</p>	<p>...</p>	<p>...</p>	<p>...</p>	<p>...</p>	<p>...</p>	<p>...</p>	<p>...</p>	<p>...</p>
<p>東文堂藏板</p>	<p>...</p>	<p>...</p>	<p>...</p>	<p>...</p>	<p>...</p>	<p>...</p>	<p>...</p>	<p>...</p>	<p>...</p>	<p>...</p>	<p>...</p>	<p>...</p>	<p>...</p>	<p>...</p>	<p>...</p>	<p>...</p>

図1 『浪華風流月旦評名橋長短錄』

咳は中央に後見役として別格扱いされ、百十九間の巨大な難波橋に見立てられている。さらにこの『名橋長短録』を評した『浪華風流名橋競ノ評』^⑤にも、

今日浪花ノ諸文人ヲ位置スルニ、儒ハ東咳春草旭莊
小山ナルヘシ

とあり、東咳が後藤春草（松陰）、広瀬旭莊、奥野小山を従えて、大坂文人の筆頭に推されている。

このように、東咳は大坂において誰知らぬものとな
い際立った存在であり、その門下に学生が雲集したもの
うなづけるというものである。

二 おびただしい門人

南岳の時代になると、塾生の数はもつと増える。明治
十年（一八七七）、田中顕美（華城）は南岳について、

各縣人々慕其節義、仰其學業、日進、在今日則生徒
在塾者六十餘名、外來受業者倍之。有一老人、謂君
成曰、子年猶少、其盛如是、此三府未曾有之人也。
君成蹙然曰、吾乃不肖之子、即是先人之餘澤矣已。

（各県の人々、其の節義を慕い、其の学業を仰ぎ、日

びに進む。今日に在りては則ち生徒の塾に在る者六
十余名、外來の受業者は之に倍す。一老人有り、君
成〔南岳のこと〕に謂いて曰く、「子、年猶お少わかき
に、其の盛なることは是の如し。此れ三府に未だ曾
て有らざるの人なり」と。君成蹙然として曰く、「吾

は乃ち不肖の子なり。即ち是れ先人の余沢のみ」と。）
と伝えている。^④すなわち、明治十年、南岳はまだ三十六
歳と若かったが、すでにその名声と学業により全国各県
から生徒が集まり、在塾生（寄宿生）だけでも六十余名、
通学生がその倍はいた。こんな例は東京・京都・大阪の
三府にはない、という。南岳は父の東咳をしのぐ豊かな
学殖の持ち主で、^⑤しかも単なる書齋型の学者ではなく書
院経営の才能もあわせもっていた。

このほか、明治時代のこととして、南岳門人で、のち
大阪経済界の重鎮として大活躍した永田仁助にすけの伝記『磐
舟永田翁傳』（泊園文庫蔵）は、

彼れ（南岳のこと——引用者注）の言説は優に門弟
の心境を動かし、心身これ師の感動を受け激發せざ
るはなかつた。其後この家塾は、南本町、若松町、

東平野町五丁目等に轉々移動すること七回に及んだが、彼の學徳を敬慕して、來つて教を乞ふものは常に數百人に及び、在塾生のみにも百數十人を下ることはなかつた。故に通學生の如きは廊下に溢れて師の説に聴き入ると云ふが如き盛況であつた。

と記している。在塾生だけで百數十人以上、通學生は常に數百人はおり、講義時には學生が廊下にあふれるほどの盛況だつたのであつて、南岳の感化力がいかに強かつたかがわかる。この數は、泊園書院最盛期における學生の概數を示すものといえよう。

このほか、明治三十五年（一九〇二）十月、南岳華甲祝賀の際に南岳は「華甲壽筵歌」（『七香齋詩抄』二十葉表）において、

及門子弟稱三千（及門の子弟、三千を称す）

とうたい、明治三十七年（一九〇四）に作成された『登門録』（泊園文庫藏）の例言には、

明治六年本院再興以來及門ノ弟子約五千人ナリ然ルニ此ニ載録スル所其ノ半數ニ滿サルモノハ及門諸君ノ住所不明却テ其半數已上ニアレハナリ。

とある。明治六年の南岳の書院復興以來、弟子は約五千人にのぼつたといふのである。住所不明者が多数いるため『登門録』にそのすべてを載せることができなかつたともいい、實際、『登門録』所載の門人を数えると千六百五十六名になる。『登門録』は明治期の泊園塾生名簿としては最も整備された記録であり、これに洩れた者を含めて塾生約五千人というのは實際の數と見てよいと思われる。

昭和時代になると、昭和九年（一九三四）十一月発行の新聞『泊園』第十二号所載の「泊園會第一回定時總會報告書」に「及門の子弟は萬を以て數へ」たという。南岳亡き後、黃鵠、黃坡、石濱純太郎が引き続き書院を維持したことを考えれば、門人は累計で確かに一万人を越えたであろう。他に書院の朝講や尚徳會など講筵の聴講者、詩社、積奠會の参加者などを含めると、泊園書院の教えを受けた者は相當な數にのぼるに違いない。

これらを含めた正確な數字を知るのは難しいが、要するに塾生數（寄宿生）としては明治中期に約五千名、昭和初期には累計一万人を越えたというのが、さしあたり

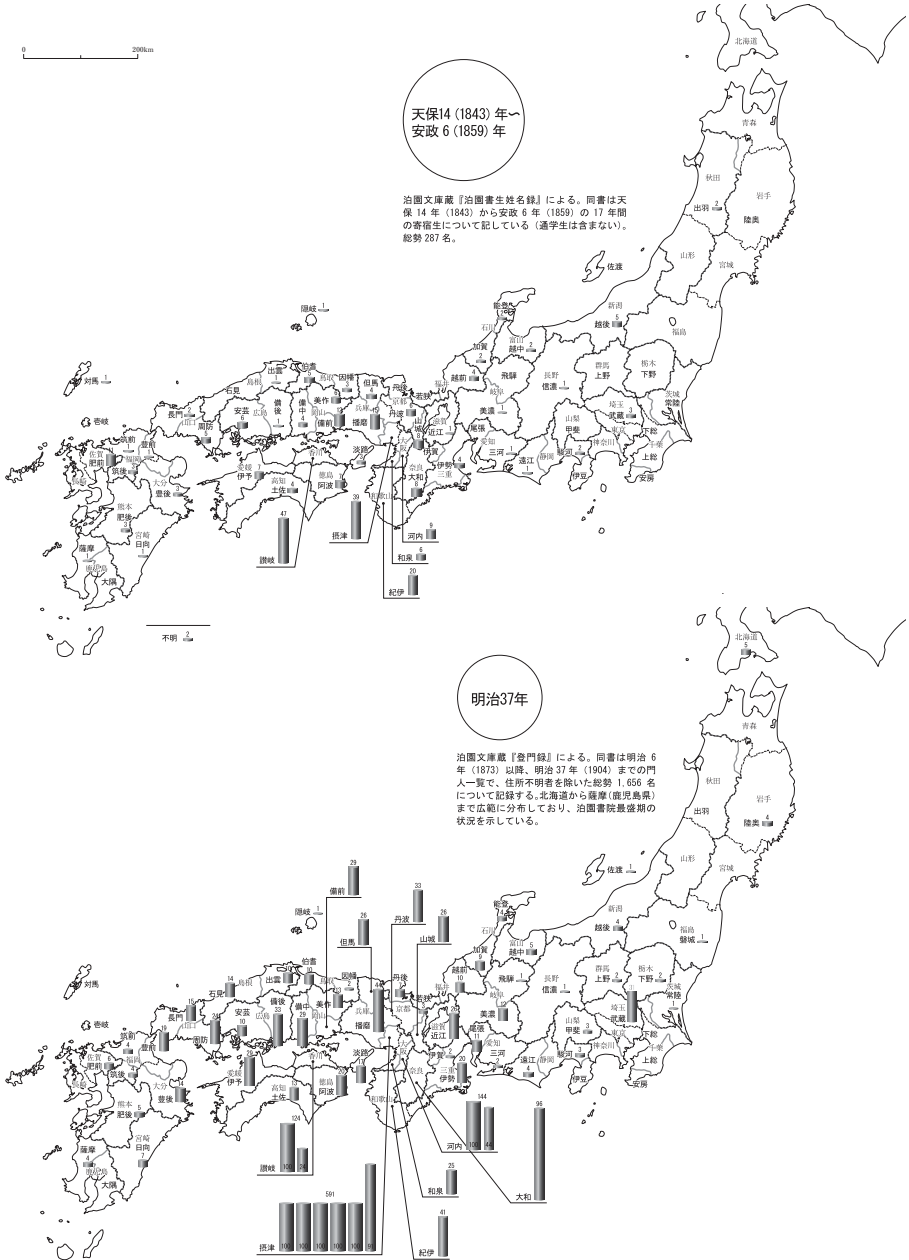


図2 泊園書院門人分布図(藪田貴教授の協力により作成)

信頼しうる目安であろう。

図2に掲げたのは幕末および明治中期における泊園門人分布図であるが、これを見てもその人脈が全国の広い範囲に及んでいたことがわかる。

三 活躍する門人

このように、泊園書院で学んだ門人はおびただしい数にのぼるが、のちに各界で活躍することになった者も当然ながら多い。その主な人物を列挙してみよう。

たとえば幕末の砲術家高島秋帆、豊岡藩（兵庫県）の藩主の京極高厚、尼崎藩主の松平忠興、藩主勤王の志士で明治時代に外務大臣となった陸奥宗光、探検家の岡本韋庵、近代ジャーナリストの草分け岸田吟香、『朝日新聞』初代編集長の津田貞、大阪財界の重鎮永田仁助、武田薬品工業の創業者武田長兵衛、尼崎紡績工場（現ユニチカ）の創業者福本元之助、明治大学の初代学長松岡康毅、中央大学（英吉利法律学校）創立者の一人で東京弁護士会長となった山田喜之助、商工大臣をつとめた係孫一、第四代朝鮮総督府政務総監となった下岡忠治、東洋

学者の幣原坦、漢学者の岡鹿門、牧野謙次郎、島田欽一らは、いずれも泊園書院で学んだ人たちである。

また、中国哲学研究者として多くの業績をあげた金谷治、本学の学長・理事長を長くつとめた大西昭男、関西大学第一高等学校校長の長谷川雅樹は、いずれも本学専門部時代における黄坡の聴講生であった。

これらの人々についてはこれまで十分調査がなされておらず、あまり周知されていなかったが、今回の調査で初めて泊園関係者であることが明らかになった人物も多い。

ちなみに、現在の森下仁丹株式会社の創業者、森下博は明治三十八年（一九〇五）、常備薬「仁丹」を発売したが、仁丹の名は森下が平素敬服していた南岳の命名による。また明治四十五年（一九一二）、大阪新世界のルナパークに建てられた「通天閣」の命名者もほかならぬ南岳であった。⁶⁾

このほか、黄坡の長男の藤澤桓夫は関西を代表する小説家となり、織田作之助、司馬遼太郎、田辺聖子らはいずれもその薫陶を受けている。桓夫は泊園書院を継ぐこ

とはなかったが、戦後、関西大学に泊園文庫が一括寄贈されたのは桓夫の決断による。

四 波乱に富んだ歴史

次に、その波乱に富んだ歴史がある。改めて整理するならば、泊園書院の歴史は次の四つの段階に分けることができる。

第一期 江戸時代後期から幕末 文政八年（一八二五）～慶応四年（一八六八）

東暎による泊園塾開設と隆盛、南岳による継承

第二期 明治初期 明治三年（一八七〇）～同五年（一八七二）

南岳による讃岐高松「泊園塾」の開設

第三期 明治・大正時代 明治六年（一八七三）～大正九年（一九二〇）

南岳および黄鹄・黄坡による書院の発展

第四期 大正末期・昭和前期 大正九年（一九二〇）

～昭和二十三年（一九四八）

黄坡による書院の継承と石濱純太郎による新展開、戦災による焼失

第一期は東暎による泊園塾の開設と発展、そして幕末の南岳による継承時期である。この時期、泊園書院は大坂における徂徠学派の中心として儒学と文芸の発展に寄与するとともに、幕末期に至って勤皇の志士を数多く輩出した。この時期は四十三年と、かなり長い。

第二期は、讃岐高松に帰った南岳によって新たに泊園塾が開かれた時期で、わずか二年間しかないが、一つの段階として数えるべきであろう。明治維新时期における騒乱のさなか、南岳が再度大阪に出ることは必ずしも予期されていなかったからである。南岳によるこの時期の塾経営は、第三期の大阪における泊園書院に継承されるという点でも重要である。

第三期は大阪にもどった南岳によって泊園書院が再興され、最も隆盛をみた時期である。鴻儒南岳の名声と学問、人徳によって、畿内をはじめ全国から学生が集まり、

政界・官界・法曹界・実業界・教育・ジャーナリズム・学術・文芸などの各界に、上述したようなすぐれた人材を輩出し、大阪のみならず、近代日本の発展に大きく寄与したのである。壮年期の黄鵠・黄坡も南岳を支え、泊園書院は黄金時代を迎えた。この時期は二十九年に及んでいる。

第四期は、大正九年（一九二〇）二月における南岳の死去、大正十三年（一九二四）九月における黄鵠の死去をうけて、黄坡と石濱純太郎が書院を主宰した時期である。とりわけ大正九年五月、南岳死去直後に石濱が黄坡の協力のもとに設立した「泊園書院学会」は、内藤湖南ら京都学派の影響のもとに当書院を近代東洋学の拠点として再出発させようとする勇氣ある試みであった。この泊園書院学会の活動自体は四年ほどで休止のやむなきに至るが、石濱と黄坡の努力には重要な意義があったといえる。

黄坡が本学の子科、ついで専門部の講師（のちに教授）となり、泊園書院と本学の縁が生じたのもこの時期である。石濱も昭和四年（一九二九）に本学法文学部文学科

の講師となった。

しかし、昭和二十年（一九四五）六月の大阪大空襲によって書院の建物は灰燼に帰し、ついで昭和二十三年（一九四八）、黄坡の死去によって書院の活動は終わりを告げた。この第四期は足かけ二十八年にわたる。

五 書院の出版活動

泊園書院が刊行物を継続して出版した点も大きな特色である。これは書院の活動を社会に周知するとともに、泊園塾生・同窓生の組織を維持するのに重要な役割を果たしている。

まず、明治二十二年（一八八九）に「泊園同窓会規則」が定められ、同会はその後は毎年同窓会誌を発行し、書院の活動や会員の消息、「文苑」「詩壇」といった会員の漢詩文欄、会計報告などの情報を載せた。同窓会誌は少なくとも大正六年（一九一七）の「第貳拾參四六五回」まで出ているが、同窓会自体は昭和前期まで続いた。

次に、大正九年（一九二〇）、石濱と黄坡は上述の「泊園書院学会」を設立、高度な学術誌『泊園書院学会々々報』

を第二冊までだが刊行している。黄坡と石濱はさらに昭和二年（一九二七）十二月、タブロイド版新聞『泊園』を創刊した。この新聞はその後ほぼ毎月刊行され、第五十六号（一九四二年五月）まで続き、さらに一ノ一号（二ノ四号（一九四二年六月）一ノ四三年九月）に至っている。内容は書院の活動の紹介、漢詩文の掲載、会員動向、写真、資料紹介などきわめて多岐にわたっている。

このような多数の刊行物の出版は泊園という学問所を中心としていかに多くの人々が結集していたかを物語るものであり、書院の教育・講学が絶え間なく続いていたことの証でもある。このほか、東咳・南岳・黄鵠・黄坡の著作には泊園書院から刊行されたものも多い。いわば「刻書」も行なっていたわけである。こうしたことは泊園書院の精力的活動をよく示すものであり、これまた近代の私塾としては他に例を見ないところである。

六 戦 後

先述したように、昭和二十三年（一九四八）、黄坡の死去によって泊園書院は幕を閉じる。しかしその後、本学

が泊園の精神を受け継ぐことになった。この時期において重要なのは泊園文庫の寄贈、東洋文学科の開設、東西学術研究所の設立、泊園記念会の創設などであり、近年においてはグローバルCOEの採択を挙げることができ

る。まず、昭和二十六年（一九五一）、戦災を免れた泊園書院の蔵書その他の所蔵品が、かねてから縁の深かった本学に一括寄贈され「泊園文庫」が誕生した。泊園文庫は一万六千五百点余、二万数千冊にのぼる書籍を中心に、東咳以下、泊園院主の自筆稿本約六百二十点余、さらに印章百七十二顆や多数の書画を含む一大コレクションである。まさに漢籍の宝库であり、日本近世・近代の大坂文芸の縮図といえよう。

ついで同年には泊園書院の学術を受け継ぐべく、文学部に東洋文学科（現在の中国学専修）が開設されるとともに、泊園文庫の整理を重要な目的として東西学術研究所が設立された。そして昭和三十六年（一九六一）年には泊園記念会が設立されている。その後、泊園記念会では毎年一回、公開講演会を「泊園記念講座」の名で開催

し、現在に至っている。

このほか、平成二年（一九九〇）、泊園記念会開設三十年の際には西田奎一氏より書籍の寄贈がなされた。南岳・黄坡の高弟だったその父、西田幾太郎（号は逸堂）の蔵書で、百八十八点、計六百六十四冊を数え、現在、東西学術研究所に所蔵されている。

さて、石濱純太郎は戦後から現在に至る関西大学の東洋学に大きな足跡を残した。上述したように、大正中期以降、石濱の登場によって泊園書院は新しい学術の風を吹き込まれた。戦後の昭和二十四年（一九四九）、石濱は新設された本学文学部の教授として研究と教育に貢献しており、本学に東西学術研究所と東洋文学科が設立されたのもほかならぬ石濱の尽力によるものである。石濱は昭和三十二年（一九五七）、本学最初の文学博士号を授与されている。

さらに、石濱の薫陶を受けた本学教授・大庭脩は昭和六十一年（一九八六）、日本漢籍受容の研究により学士院賞を受けているが、大庭のこの研究はもともと泊園書院・文庫の調査に始まるものであった。

石濱が中心となって設立した東西学術研究所はすぐれた研究を展開し、近年、文部科学省の学術フロンティア「アジア文化交流研究センター」（CSAC）の設立、さらには「東アジアの文化交流」を課題とするグローバルCOEの採択へとつながっている。

このように見ると、本学における中国学・東洋学が泊園書院の伝統を基礎に成り立っていることに改めて気づかされるのである。泊園書院は東京の私塾の二松学舎や慶応義塾のように「大学」にはならなかったが、その果たした役割はきわめて大きかったといわなければならぬ。そして戦後において、本学で大輪の花を新たに咲かせたことになる。

ところで、泊園書院の建物は戦災によって焼失したが、戦後、黄坡の子の桓夫によって記念碑が立てられた。写真3がそれである。中央に桓夫の自筆で「泊園書院址」と大書され、左下に「藤澤桓夫識」（藤澤桓夫識^{しよ}）と書かれている。この碑は今年八月新たに見出されたもので、所在地は大阪の旧竹屋町、現在の島之内一丁目の泊園書院分院、のちの本院（写真2）の跡地である。本碑は民



写真3 藤澤桓夫「泊園書院址」碑（本学以文館北側）

家の中庭に置かれていたため、その存在は外部に知られていなかったが、このたび幸運にもそれがわかったのである。偶然とはいえ、泊園記念会創立五十周年記念国際シンポジウム（後述）の準備中に見出されたのも不思議なめぐり合わせであった。

その後、この碑は各位の配慮と尽力により本学の以文館北側に移置されることになり、あとにいう国際シンポジウムの際にその除幕式を行なった。以文館には泊園書院と関係の深いグローバルCOE「文化交渉学教育研究拠点」が置かれており、この碑は本学における中国学・東洋学の出発点を示す記念としてきっと長く親しまれることであろう。

七 記念行事など

昨年（二〇一〇）、泊園記念会は開設五十周年を迎え、十月二十三日、第五十回泊園記念講座として国際シンポジウム「東アジアの伝統教育と泊園書院」を本学以文館で開催した。プログラムは次のとおりである。

泊園書院址碑除幕式

基調報告

藪田 貫（本学文学部教授、泊園記念会会長）

講演

ロナルド P. トビ（アメリカ、イリノイ大学教授）

水田紀久（木村兼葭堂顕彰会代表）

李弘祺（Thomas H. C. Lee、台湾、国立交通大学教授）

鄭萬祚（韓国、国民大学校教授）

辻本雅史（京都大学大学院教授）

湯浅邦弘（大阪大学大学院教授）

WEB 泊園文庫デモンストレーション

吾妻重二（本学文学部教授、泊園記念会副会長）

講演者はそれぞれアメリカ、中国・台湾、中国、韓国、日本の伝統教育および書院研究の第一人者として活躍する著名な方々であり、学生、教員、一般参加者ほか、藤澤家・石濱家の方々にも多数参加していただき、盛大裏に終了した。

このほか、十月十八日から十一月十三日までのほぼ一

カ月、特別記念展示「藤澤東暎・南岳・黄鶴・黄坡と石濱純太郎の学統」を二会場に分けて開催した。第一会場（総合図書館展示室）では「泊園の学術と泊園文庫」と題して泊園文庫に所蔵される貴重書や彼らの著作、書画などを展示し、第二会場（正門インフォメーション横アトギヤラリー）では「泊園書院の歩み」と題して、百二十余年にわたる泊園書院の歴史と発展を、写真やパネルを多用してたどった。このような大規模な展示会は泊園記念会始まって以来のことであり、多くの参観者があった。

泊園書院および文庫はこれまで一部の関係者にしか知られていなかった。まさに「知る人ぞ知る」だったのである。しかし今回、記念行事開催のために調査を行なっていて筆者自身驚かされたのは、泊園がこれまでの知見をはるかに超える巨大な存在だったということである。近世・近代における大阪文化の拠点として、また日本の漢学・中国学、東アジア学を担った学問所として、泊園書院は今後いつその究明が必要である⁸⁾う。

- (1) 『懷徳堂研究』第一号（大阪大学文学研究科・文学部 懷徳堂研究センター、二〇一〇年）、釜田啓市氏の同書翻刻による。著者の中井木菟麻呂（一八五五—一九四三）は懷徳堂の中井桐園の長男で、中井履軒の曾孫にあたる。
- (2) 関西大学総合図書館にも一本を蔵するが、傷みがひどいため、いま松村博『大阪の橋』（松籟社、一九八七年）二〇頁の影印による。なお、『文学研究』第五九号（日本文学研究会、一九八四年）に石井功一・菅宗次両氏による『名橋長短録』の解題と翻刻がある。
- (3) 折本一帖。関西大学総合図書館蔵。表紙題簽は「風流菴之尊」。
- (4) 藤澤南岳編『楊史文鈔』二冊（写本、泊園文庫蔵）に綴じこまれた田中華城自筆序。いま石濱純太郎「泊園文庫藏書記(二)」〔関西大学東西学術研究所々報』第二号、一九五二年）の翻刻による。
- (5) 水原渭江は南岳について「経・史・子・集の諸学に広く通じ、（中井）竹山以後稀にみる学匠であった」と賞している。首肯できる評価である。『大阪の学問と教育』（毎日放送文化双書六、一九七三年）「大阪の漢学」のうち「大阪の漢詩壇について」（同書九八頁）。
- (6) 『朝日新聞』（大阪版）昭和六十一年（一九八六）三月二十五日夕刊の記事「命名は儒学者 通天閣鼻高々」を参照。
- (7) 泊園文庫および同文庫所蔵の自筆稿本については、吾妻重二「関西大学泊園文庫自筆稿本目録について」（『アジア文化交流研究』第五号、関西大学アジア文化交流研究センター、二〇一〇年）を参照されたい。
- (8) 本稿で述べた泊園書院関係資料に関して、筆者は先般『泊園書院歴史資料集—泊園書院資料集成1』（関西大学東西学術研究所資料叢刊二九—一、関西大学出版部、二〇一〇年）、および『藤澤東咳・南岳・黄鶴・黄坡と石濱純太郎』（泊園記念会創立五十周年特別記念展示展観目録、関西大学東西学術研究所、二〇一〇年）を刊行している。あわせて参照していただければ幸いである。
- (あづま じゅうじ 関西大学文学部教授)